

幼児の不安傾向とその関連要因の検討

(中間報告)

筑波大学大学院 西 澤 千枝美

Young children's anxiety tendencies and correlates

Institute of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba NISHIZAWA, Chiemi

【キー・ワード】不安, 幼児, 不安障害

問題と目的

子どもの不安傾向

子どもの心理的問題のうち、不安に起因すると考えられているものは非常に多い。子どもの不安は、回避的・内向的な行動傾向だけでなく、関係性攻撃（磯部,2002）や仲間関係の悪さ・学業成績の低さ（Schroeder & Gordon,2002）など、その他の様々な問題とも関係していることが指摘されている。さらに、不安症状を示す児童は、成人になってからも不適応を起こす可能性が高いため、早期の発見や介入が必要とされている（石川・坂野, 2005）。

子どもの不安障害

Anderson,Williams,McGee, & Silva(1987)の報告によると、児童期における不安障害の有病率は8～12%程度であるが、一般児童の中にも不安障害の症状を示す不安障害傾向の児童が少なからずおり（石川・大田・坂野, 2003）、非臨床群において研究を行う際にも、そこで扱う不安は不安障害との関係の中で捉えられる必要があると考えられる。

そのための視点の1つとして、不安障害がその症状によって分類されているように、不安傾向の多次元性を考慮することが挙げられる。Spence（1998）は、DSM-IV（American Psychiatric Association:APA, 1994）の不安障害の診断基準に基づき、子どもの不安障害を分類別に査定する尺度としてSpence Children's Anxiety Scale（SCAS）を作成した。一方、石川・大田・坂野（2001）は、これに基づき日本語版SCAS改訂版（SCAS-JR）を作成し、一般児童でも不安障害の下位カテゴリーと対応する不安傾向を示すことを明らかにした。そのため、SCAS-JRは不安障害の査定だけではなく、児童の不安傾向を多次元的に捉える尺度として現在広く利用されている。

幼児期における不安傾向

一方、児童期以前の幼児期における不安傾向について扱った研究は、特にわが国ではほとんど見当たらない。しかし、不安が子どもに及ぼす長期的な影響やその持続性が示唆されている（Schroeder & Gordon,2002）ことを考慮すると、幼児期においてもより詳細な研究を行い、その不安傾向を児童期

と同様に捉えた上で、発達の観点から検討していく必要があると考えられる。そこで、本研究では、幼児期における不安傾向を不安障害の観点から多角的に捉え、適切な査定の方法とその内容および関連要因を具体的に検討することで、子どもの不安傾向を発達の観点から検討する際の示唆を得ることを目指す。

これまでに行ってきた研究（西澤・濱口，2007）では、現場において有用性の高い、幼児の不安傾向を簡易に査定することのできる手段の開発を目指し、「幼児用不安傾向評定尺度」の作成を行った。その結果、幼児期における不安傾向は、不安障害の分類に従う「社会不安」、「分離不安」、「特定の恐怖」、「全般性不安」の4分類において多角的に捉えられることが明らかになった。しかし、本尺度は信頼性・妥当性において一部不十分な点がみられるため、今後更なる検討を重ね、より有用なものにしていく必要があると考えられる。さらに、作成された尺度によって捉えられた幼児の不安傾向の特徴や、それらを規定する関連要因についても具体的に検討し、不安に起因する問題を持つ子どもへの援助についての提言を行っていきたいと考えている。本稿では、幼児用不安傾向評定尺度における妥当性の検討の一部を報告する。

方法

対象者：茨城県内の8ヶ所の公立・私立の幼稚園・保育所に在籍する3～6歳の子ども644名の保護者およびその保育者64名。

調査時期：2009年6～7月。

調査手続き：幼稚園・保育所に協力を依頼し、同意が得られた施設において、質問紙と保護者向けの依頼文を1部ずつ封筒に入れたものを子どもを通じて配布し、保護者に回答してもらった。回答後は、子どもに持たせるか送迎の際に持参してもらうなどして、クラス担任まで提出してもらう形をとった。保育者を対象とした質問紙については、職員室等に置かせてもらうなどの形をとり、回答後、職員室等に設置した封筒に提出してもらった。いずれも回答は全て無記名で行われ、調査への協力は自由であり、協力しなかった場合にも不利益は一切生じないことを、質問紙及び依頼文に明記した。さらに、保護者を対象とした質問紙については、提出の際は、入っていた封筒に入れて封をしてもらい、調査者以外が回答を見ることのできないよう配慮した。

なお、本研究は筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施された。

質問紙の構成：保護者を対象とした質問紙は、以下の構成であった。

1. フェイスシート 記述対象となる子どもの年齢（端数分の月齢を含む）、性別、きょうだい数及び出生順位、幼稚園・保育所への入園（所）の時期、回答者と子どもの関係について記入を求めた。
2. 幼児用不安傾向評定尺度 西澤・濱口（2007）の30項目を研究に先立ち再度検討し、「特定の恐怖」に1項目、「全般性不安」に3項目を追加した。それぞれの項目について、子どもについてそのような様子が「全く当てはまらない…1、当てはまらない…2、どちらともいえない…3、当てはまる…4、非常に当てはまる…5」の5件法で回答を求めた。さらに、項目の表面的妥当性について検討するため、各項目について、「子どものそのような様子を見たことがないため答えられない」、または

「幼児期の子どもの様子を表す文章として不適切である」のどちらかに該当すると感じた場合には、回答欄の右隣に設けた欄にそれぞれ○をつけるよう求めた。その他、幼児用不安傾向評定尺度の構成概念妥当性の検討のために、もう1つ尺度を同時に用いたが、本稿では割愛する。

また、保育者を対象とした質問紙は、以下の構成であった。

1. フェイスシート 回答者の性別、勤務している幼稚園・保育所の別および公立・私立の別、保育者としての勤続年数について記入を求めた。

2. 幼児用不安傾向評定尺度（項目評定） 幼児用不安傾向評定尺度の表面的妥当性について検討するため、尺度の各項目について、「幼児期のお子さんが不安を感じている場面を表す文章として不適切」であると感じた場合には、回答欄に○をつけてもらうよう求めた。

結果と考察

幼児用不安傾向評定尺度の34項目について、保護者により「見たことがなく答えられない」および「幼児期の子どもの様子を表す文章として不適切」と評定された度数と全体（N=644）に占める構成比をそれぞれ算出した。各項目の評定された度数について χ^2 検定を行った結果、「見たことがなく答えられない」、「幼児期の子どもの様子を表す文章として不適切」のどちらについても、評定された度数が評定されなかった度数より有意に多い項目はなかった。この結果を表1に示す。

同様に、保育者により「幼児期の子どもの不安を感じている場面を表す文章として不適切」と評定された度数と全体（N=62）に占める構成比を算出した。各項目の評定された度数について χ^2 検定を行った結果、「5. 初めて会う人に話しかけられても、答えられることが多い」、「7. 自分や家族に何か悪いことが起きないかと心配する」、「9. クモやへびなどを恐がらない」、「19. 手を洗うこと、掃除、自分で決めた順番で物を置くなど、自分で納得するまできちんとやらなければ気のすまないことがある」、「20. 今まで経験したことのない行事や遊びでも、ためらわずすぐに入り込める」、「27. 保護者にまわりついたり、後追いをすることはあまりない」、「28. 幼稚園・保育園ではおしゃべりなほうだ」の7項目について、評定された度数と評定されなかった度数の間に有意差がなかった。この結果を同様に表1に示す。項目7・19以外の5項目は全て逆転項目であったため、これらは逆転項目としてある程度妥当であると考えられたが、項目7および18については、表面的妥当性が低い可能性があると考えられた。また、逆転項目であって評定された度数がされなかった度数よりも有意に少なかった項目13も、逆転項目として不適切である可能性が考えられた。従って、今後行う予定である因子分析の結果も踏まえた上で、尺度構成におけるこれらの項目の扱いについて検討していくこととした。

表1 幼児用不安傾向評定尺度の各項目の評定された度数と全体に占める構成比

	保護者(N=644)				保育者(N=62)	
	見たことがない		適切でない		度数	%
	度数	%	度数	%		
1 保護者から離れると、泣いたり恐がったりする。	1	0.2	1	0.2	2	3.2
2 みんなの前で話をすることが苦手である。	4	0.6	3	0.5	5	8.1
3 何か新しいことを始めるとき、しりごみしてなかなか始められない。	1	0.2	1	0.2	2	3.2
4 園全体やクラスでの活動の時には、緊張して不安そうな表情になる。	6	0.9	1	0.2	4	6.5
5 初めて会う人に話しかけられても、答えられることが多い。(*)	0	0.0	1	0.2	37	59.7
6 大きな声で歌うことはあまり見られない。	0	0.0	1	0.2	13	21
7 自分や家族に何か悪いことが起きないかと心配する。	37	5.7	36	5.6	26	41.9
8 高いところを恐がる。	12	1.9	1	0.2	3	4.8
9 クモやヘビなどを恐がらない。(*)	18	2.8	1	0.2	38	61.3
10 失敗や間違いをしてしまうのではないかと心配する。	13	2.0	15	2.3	4	6.5
11 なかなか遊びに入らず、友達のことを見ていることが多い。	1	0.2	2	0.3	7	11.3
12 暗いところを恐がる。	12	0.9	0	0.0	1	1.6
13 担任の保育者に対して、自分から話しかけることが多い。(*)	12	0.9	1	0.2	20	32.3
14 絵を描くとき、人に見られないように隠しながら書く。	2	0.3	3	0.5	13	21
15 何か気になることがあると、大人にたびたび確かめなければ気がすまないことがある。	6	0.9	5	0.8	4	6.5
16 何か悪いことが起きるのではないかと心配することが多い。	38	5.9	31	4.8	17	27.4
17 登園時に保護者と離れにくく、泣くことが多い。	1	0.2	0	0.0	2	3.2
18 地震や台風などの自然災害を恐がる。	14	2.2	6	0.9	3	4.8
19 手を洗うこと、掃除、自分で決めた順番で物を置くなど、自分で納得するまできちんとやらなければ気がすまないことがある。	1	0.2	2	0.3	24	38.7
20 今まで経験したことのない行事や遊びでも、ためらわずすぐに入り込める。(*)	2	0.3	1	0.2	37	59.7
21 たくさん人が集まる所に行くと、保護者から離れなくなることがある。	1	0.2	2	0.3	1	1.6
22 健康診断や予防注射の時には落ち着きがなくなり、保護者から離れなくなったり泣いたりする。	0	0.0	1	0.2	0	0
23 特に理由はなさそうなのに、恐がって泣いたり保護者から離れなくなることがよくある。	6	0.9	2	0.3	4	6.5
24 初めての場所に行ったとき、なかなか保護者のそばを離れようとしらない。	0	0.0	2	0.3	1	1.6
25 お化けや怪獣など、想像上のものを恐がる。	3	2.0	3	0.5	2	3.2
26 行事や当番など、新しい活動や状況に慣れるのに時間がかかる。	3	2.0	2	0.3	8	12.9
27 保護者にまわりついたり、後追いをすることはあまりない。(*)	0	0.0	1	0.2	37	59.7
28 幼稚園・保育園ではおしゃべりなほうだ。(*)	5	2.3	6	0.5	28	45.2
29 仲の良い友達以外の友達と話しているのをあまり見かけない。	2	1.9	20	0.9	14	22.6
30 友達からどう見られているかを気にすることが多い。	30	4.7	5	3.1	21	33.9
31 神経質や心配性だと感じることもある。	1	0.2	2	0.8	11	17.7
32 保護者に甘え、手助けを求めることが多い。	0	0.0	0	0.3	7	11.3
33 雷や花火など大きな音を恐がる。	0	0.0	1	0.2	2	3.2
34 いろいろなことを、くよくよ気にすることが多い。	10	1.6	13	2.0	11	17.7

・(*)は逆転項目

・斜体の部分は、 χ^2 検定において評定された度数とされなかった度数の間に有意差がなかったもの。(ただし、逆転項目を含む)

今後の計画

今後は、サンプルを追加した上で因子分析を行って、本稿の結果も踏まえながら幼児用不安傾向評定尺度の尺度構成と信頼性・妥当性の検討を行う。そして、作成された尺度を用いて、幼児の不安傾向の性差・年齢差や時間の経過に伴う変化の特徴について検討を行いたいと考えている。さらに、そうした幼児の不安傾向に影響を与える要因として、子どもの気質や養育者の養育行動などを想定し、それらと不安傾向との関連についても検討を行う予定である。

引用文献

- American Psychiatric Association (1994). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Forth edition*. Washington D.C.:American Psychiatric Association. (DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル新訂版 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(訳)(1996). 医学書院.)
- Anderson, J.C., Williams, S., McGee, R., & Silva, P.A. 1987 DSM-III disorders in preadolescent children. *Archives of General Psychiatry*, **44**, 69-76.
- 石川信一・大田亮介・坂野雄二 (2001). 日本語版 SCAS (スペインス児童用不安尺度) 作成の試み 早稲田大学臨床心理学研究, **1**(1), 75-84.
- 石川信一・大田亮介・坂野雄二 (2003). 児童の不安障害傾向と主観的学校不適応の関連 カウンセリング研究, **36**, 264-271.
- 石川信一・坂野雄二 (2005). 児童における不安症状と行動的特徴の関連—教師の視点からみた児童の社会的スキルについて— カウンセリング研究, **38**, 1-11.
- 磯部美良 (2002). 幼児の関係性攻撃と社会的スキルに関する短期縦断的研究 広島大学大学院教育学研究科紀要, **3**(51), 249-255.
- 西澤千枝美・濱口佳和 (2007). 幼児の不安傾向と行動的特徴との関連 筑波大学第二学群人間学類平成 19 年度卒業論文, 未公刊.
- Spence, S.H. (1998). A measure of anxiety symptoms among children. *Behavior Research and Therapy*, **36**, 545-556.
- Schroeder, C. S., & Gordon, B. N. (2002). Fears and anxieties. Schroeder, C. S., & Gordon, B. N. (Eds.), *Assessment and treatment of childhood problems*(2nd edition), pp.262-301.

謝 辞

本研究を実施するにあたり多大なご指導を賜りました, 筑波大学大学院人間総合科学研究科濱口佳和教授に心より感謝いたします。また, 調査の実施にご理解とご協力をいただきました幼稚園・保育所の先生方, 保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

